

江戸後期における命令形による命令表現の使用

—「お～なさい」「～なさい」「お+動詞連用形」を中心に—

山 田 里 奈

1. はじめに

本稿は、①江戸後期における尊敬表現形式の命令形による命令表現—「お～なさい」、「～なさい」、「お+動詞連用形（例；お持ち、おいで等）」—の使用実態（特に、「お～なさい」と音訛形「お～なせへ」、「～なさい」とその音訛形「～なせへ」の使用の違い）を考察し、②同形式の命令形以外の使用実態—「お～なさる」、「～なさる」—との比較を行うことで、用法による表す敬意の違いを明らかにすることを目的としている。一般的に、命令形による命令表現は強いひびきを持つ。そのため、「お～なさる」「～なさる」を用いる場合と「お～なさい」「お～なせへ」、「～なさい」「～なせへ」を用いる場合が必ずしも一致しない。しかし、どのように一致していないのかという対応関係について詳しく述べた研究は管見の限り見られない。そこで、命令形による命令表現の使用実態の考察と同形式の命令形以外の使用実態⁽¹⁾との比較によって、「お～なさい」「～なさい」（それぞれ音訛形を含む）、「お+動詞連用形」と「お～なさる」「～なさる」の使用の分布の違いを明らかにしていきたい。

2. 江戸後期における尊敬表現形式の命令形による命令表現の表す敬意

江戸語後期における命令形による命令表現の表す敬意や使用実態については、小松寿雄（1966⁽²⁾）、山崎久之（1966⁽³⁾）、小島俊夫（1974⁽⁴⁾）、広瀬満希子（1991, 1992, 1993, 2000）等多くの研究がある。小松（1966）では全体の傾向を、山崎（1966）と小島（1974）では対称代名詞との対応関係を、それぞれ明らかにしている。しかし、山崎（1966）や小島（1974）の体系表作成という研究方法は、用例数が示されていないために、同じ段階に所属する形式の違いや他の形式との関わりという点が見えにくくなっている⁽⁵⁾。一方、広瀬（1991～2000）は、階層や性別という観点からまとめている。その研究では「お～なさい」とその音訛形「お～なせへ」、「～なさい」とその音訛形「～なせへ」がまとめて扱われているが⁽⁶⁾、それぞれの違いを見る必要があるだろう。また、個別の資料における考察であるため、総合的な特徴がわかりにくくなっている。

3. 考察の方法

本稿では用例数を示した表（以下、「用例数入り体系表」と呼ぶ）を作成することで、それぞれの使用実態を探っていく。「2. 江戸後期における尊敬表現形式の命令形による命令表現の表す敬意」で

述べたように、用例数が示されないために不明瞭になっている点があるためである。

【調査対象資料】 調査対象資料は、江戸後期の資料（洒落本、滑稽本、人情本）を扱う。各資料の詳細は最後の頁にまとめている。各資料に付した下線部を省略形とし用例には下線部のみを記す。

【考察対象】 考察対象は命令形による命令表現（通常語は除く）とする。

【体系表作成にあたって】 用例数入り体系表の縦軸となる上下関係は、山田（2012）に示したように、基本的には、社会的身分によって A〈下→上〉の関係、C〈上→下〉の関係（主従関係、身分差）、B〈対等〉の関係（身分差なし）に3分類する（用例には A、B、C と記す）。なお、親疎関係によって単なる上下関係では判断できない例は、適宜説明を加えることとする。体系表は、階層ごと、つまり、中流以上の人々、下層の人々、芸妓（遣手、禿も含む）に分ける⁽⁷⁾。店の主人から客に対して用いる例は、対称代名詞や呼称により高い敬意を表していると判断できる場合 A とし、他は B とする。また、場面によって一時的に上下関係の変化が認められる例（全3例）は、次の例1のように扱っている。

（例1）どふぞ御免なさいましヨウ。（中流女性お民→車夫（悪漢））【A】 [『告』第二編第十二章 461]

例1は中流女性から車夫（悪漢）に対して用いられた例である。この発話は中流女性が聞き手の悪漢に対して助けを請う場面で用いられているため、C の関係ではなく A の関係とした。

【表す敬意の判断について】 用例数入り体系表の中で、B〈対等〉の関係以上で用いる場合を高い敬意を表す尊敬表現であるとする。

4. 江戸後期における命令形による命令表現の使用実態

次頁以降の【表1, 2, 3】は、「3. 考察の方法」で述べた基準によって作成した用例数入り体系表である。

この表を見ると一特に中流以上の人々の使用を中心に見ると、表現を大きく3分類することができる。各階層に共通して B 以上で用いられているグループ（「お～あそばしまし」「お～あそばせ」、「お～なさいまし」）、A から C までの広い範囲で用いられているグループ（「お～なさい」「お～なせへ」「～なさい」「～なせへ」「お+動詞連用形」）、B 以下で用いられているグループ（「～さっし」「～や」等）である。本稿では、A から C までの広い範囲で用いられているグループを中心に考察を行う。考察は、「お～なさい」と「お～なせへ」、「～なさい」と「～なせへ」のように元の形と音訛形を比較しながら考察を行った後、「お+動詞連用形」を含めて比較していくこととする。

4.1 「お～なさい」と「お～なせへ」の使用

「お～なさい」（「お～なされ」「お～なはい」を含む）と「お～なせへ⁽⁸⁾」について、用例数と表す敬意に焦点を当てて見ていく。

まず、本調査の結果を【表1, 2, 3】で確認する。「お～なさい」と「お～なせへ」は、【表1】中流以上の人々の使用では、A から C までの広い範囲で、【表2】下層の人々の使用では B 以上で用いら

表1 中流以上の人々の使用

上下関係 話し手の性別	A (下→上)				B (対等)				C (上→下)				合計		
	男性		女性		男性		女性		男性		女性		男性	女性	計
尊敬表現\聞き手の性別	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性			
お～あそばしまし・ませ			6		1		1						1	7	8
お～あそばし・せ		1	2	3			2	1		1* ^①			2	8	10
お～なさいまし・ませ	9	3	32	2	9	4	20	23				3* ^②	25	80	105
お～なんし								1					0	1	1
お～なされ					2								2	0	2
お～なさい	3	5	8		23	9	52	17	1	2		4	43	81	124
お～なはい							3					1	0	4	4
お～なせへ	4				42	22	2		1	11			80	2	82
お+動詞連用形			2		18	14	38	76	1	36	13	47	69	176	245
～なはいまし			1										0	1	1
～なせんし					1								1	0	1
～なされ					2				1				3	0	3
～なさい					11	1	2	4	2	6		2	20	8	28
～なせへ	1				66	35	2		1	48	2	3	151	7	158
～さっし					157	2			2	8			169	0	169
～さっせへ					9								9	0	9
～さしゃい					2				3	2			7	0	7
～やれ					2	2		1	10	3		3	17	4	21
～や					1	13		3	5	2		5	21	8	29
れ・られ					1								1	0	1
～たまへ					9	1				4			14	0	14
合計	17	9	51	5	356	103	122	126	27	123	15	68	635	387	1022

*^①中流男性与四郎がふざけて芸妓の小万に対して用いた例である。

*^②この3例は全て洒落本において見られた例である。1例は「お～なせへし」、2例は「お～なせんし」の例である。

れており、それぞれの階層内で似た分布を示している。ただし、【表3】芸妓の使用では「お～なさい」はB以上、「お～なせへ」はAのみで用いられており、分布が異なっている。また、「お～なせへ」について、話し手の性別ごとに比較すると、男性の使用：女性の使用は、中流以上の人々の使用では80：2、下層の人々の使用では11：0となっている。つまり、用例数から見ると、「お～なせへ」の使用は女性の使用に比べて男性の使用が多い。

次に、「お～なさい」と「お～なせへ」の表す敬意について上下関係ごとに見ていく。

(1) A (下→上) の関係における「お～なさい」「お～なせへ」の使用

Aの関係での「お～なさい」の使用は、すべての階層において、高い敬意を表す場合で用いられている。次の例2は、中流女性お絹から浪人の安田幸八に対して用いられた例である。

(例2) モシまア少しお待なさい。貴君^{あなた}はきつい思ひ切り。人を助ける信実の。おこゝろなれば左

表2 下層の人々の使用

上下関係	A (下→上)				B (対等)				C (上→下)				合計		
話し手の性別	男性		女性		男性		女性		男性		女性		男性	女性	計
尊敬表現\聞き手の性別	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性			
お~あそばしまし・ませ	1		3	3									1	6	7
お~あそばし・せ				4									0	4	4
お~なさいまし・ませ	28	8	16	13	1	1	1	2					38	32	70
お~なさい	1	2	6	4	1			4					4	14	18
お~なせへ	9	2											11	0	11
お+動詞連用形		1		8		2		19					3	27	30
~なせへし	1												1	0	1
~なさい		1											1	0	1
~なせへ	5	6			14		7	21					25	28	53
~さっし					20			5					20	5	25
~さっせへ	4						2						4	2	6
~やれ					6			1					6	1	7
~や					7			4		1			8	4	12
~たまへ						1							1	0	1
合計	49	20	25	32	49	4	10	56	0	1	0	0	123	123	246

表3 芸妓の使用

上下関係	A (下→上)		B (対等)		C (上→下)		合計
話し手の性別	女性		女性		女性		
尊敬表現\聞き手の性別	男性	女性	男性	女性	男性	女性	
お~あそばし・せ	1						1
お~なさいまし・ませ	19	5		1			25
お~なまし	32	17		14	1	8	72
お~なんし	21	7		18		6	52
お~なさい	20	5	1	2			28
お~なはい	43			12			55
お~なせへ	3						3
お+動詞連用形	38	4	9	22	10	10	93
~なさいまし	1					2	3
~なせへし	1						1
~ないまし		1		1		1	3
~なまし	22	14		8	3	19	66
~なんし	4	1		3	4	5	17
~なせへ	12		1	2		1	16
~や					3	5	8
合計	217	54	11	83	21	57	443

A (下→上の関係), B (対等の関係), C (上→下の関係)

様であらうが。私の気が済ません。(中流女性お絹→浪人安田幸八)【A】『『毬』初編卷之上第一回 15]

初対面、かつ、暴漢から助けられた直後の発話であるため、高い敬意を表していると考えられる⁽⁹⁾。

一方、音訛形「お～なせへ」のAでの使用は、中流以上の人々の使用と芸妓の使用に見られるが、制約が認められる。聞き手に対して非難の気持ちやそっけない態度を取るために用いているのである。

次の例3(中流以上の人々の使用)、例4(芸妓の使用)を見てみよう。

(例3) 私どもが迷惑にやア、些も構ひなさらねへのか。コレサしつかりとお聞なせへ。(中流男性太助→中流男性万右衛門〔豪家の旦那株〕)【A】『『閑』四編卷之下第二十三回 788]

(例4) しづかにお言なせへな。(芸妓米八→中流男性・客の藤兵衛)【A】『『梅』初編卷之三 82]

例3では中流男性の太助から「豪家の旦那株」と説明される万右衛門に対して「お～なせへ」が用いられた例である。こうした人間関係では普通の会話において「お～なさる」が用いられる。しかしこの例では、「お～なさる」よりも表す敬意の低い「～なさる」(点線部)が用いられている。それは、この発話が聞き手の万右衛門を非難する場面であることが関係している。普通の会話で用いるよりも表す敬意が一段低い形式を用いることによって、口調を荒くし、聞き手に対する非難の態度を示しているのである。例4は芸妓の米八から客の藤兵衛に対して用いられた例である。この例ではわざとそっけない態度を取るために「お～なせへ」が用いられている。それは、次の例5からもわかる。例5は、例4の米八の発言や態度を、下働きの女性が諫めている例である。

(例5) [米八さんと聲をかけ、] どふもしうちがわるいヨ〔と心でいつて眼としかた〈下略〉〕(下層女性→芸妓米八)【A】『『梅』初編卷之三 79]

従って、中流男性(例3)と芸妓(例4)は、Aの関係にある聞き手を非難したり、聞き手に対してそっけない態度を取ったりするためにあえて「お～なせへ」を用いていると考えられる⁽¹⁰⁾。

一方、下層の人々の使用では、高い敬意を表す場合に使用されている。次の例6は、浮世床の下割り留吉から客の楽隠居に対して用いられた例である。

(例6) よく揉でお出なせへ。(下層・店員の留吉→中流男性・客の楽隠居)【A】『『床』初編 259]

留吉は、命令形以外では「～なはる」を用いて楽隠居を待遇している。これに関して土屋信一(2009)は、「～なはる」がかなり高い敬意を表していると述べている。ここから「お～なせへ」は下層の人々にとって高い敬意を表す表現の1つであることがわかる。例6ではくだけた場面であるために、「お～なさい」ではなく「お～なせへ」を用いているのだろう。

(2) B〈対等〉の関係における「お～なさい」「お～なせへ」の使用

Bの関係での使用について見ていく。前述したように、用例数を見ると、「お～なせへ」の使用は中流以上の人々の場合、男性使用の方が多い。中流男性の例7(「お～なさい」)、例8(「お～なせへ」)を見てみよう。

(例7) 爰へお出なさい。(中流男性佐次郎→中流男性質兵衛)【B】『『八』四編追加下 258]

(例8) ハア、さアそんなら六畳へおいでなせへ。(中流男性眼七→中流男性質兵衛)【B】[『八』四編追加249]

どちらも八笑人メンバーから中流男性質兵衛に対して用いられた例である。互いの関係は、本文中で「近所名うてのかた親父、平日は左次郎はじめ一座の能楽者などは、風上にも恐れ、又左次郎方には、風下に居るさへきらふ釜違ひの人なるが、何思ひけん〈下略〉(P217)」と説明されている。中流男性は似た人間関係で、「お～なさい」「お～なせへ」のどちらも用いることができるのである。

中流女性の使用も見られるが中流男性の使用に比べて少ない。以下の例9, 10, 11を見てみよう。

(例9) ヲヤ左様かへ夫ならお止なさい。(中流女性遠世→中流男性清之助)【B】[『閑』卷之三第六回708]

(例10) モシエ旦那があ、おつしやるから一寸おあがんなせへ。(中流以上・妻のお吉→中流以上・浮世床の主人・夫の鬢五郎)【B】[『床』初編上273]

(例11) まア聞ておくんなせへ。(中流女性卒八の母親→吞七)【B】[『八』三編追加下181]

例9は中流女性遠世から中流男性清之助に対して「お～なさい」が用いられた例である。例10は妻のお吉から夫の鬢五郎に対して、例11は八笑人メンバーの母親から八笑人メンバーの吞七に対して「お～なせへ」が用いられた例である。これらの例はいずれも、親しい間柄やくだけた場面で用いられている。中流女性の使用は似た人間関係であっても、「お～なさい」は52例、「お～なせへ」は2例しか見られない。

(3) C〈上→下〉の関係における「お～なさい」「お～なせへ」の使用

Cの関係での使用は、「お～なさい」「お～なせへ」ともに軽い敬意を表す場合に用いられている。

(例12) モシ傘^{からかさ}をお持^{もち}なさい。(中流男性鳥雅→百姓)【C】[『告』初編第六章413]

(例13) お前方^{まへがた}が出世になるといふ事なら、幾日何時でも左様^{さう}お言^{いひ}なせへ。(中流男性米次郎→中流女性の言葉遣いをするが裏住まいのおみき)【C】[『閑』卷之三第五回705]

例12は中流男性鳥雅から百姓に対して用いられた例である。他の発話においても「ごぞいます」「お～だ」等を用いて丁寧な言葉遣いで対応している。例13は中流男性米次郎から丁寧な言葉遣いをする女性おみきに対して用いられた例である。

4.2 「～なさい」と「～なせへ」の使用

「～なさい」(「～なされ」「～なはい」を含む)は、「お」や「まし(ませ)」を冠さない分、前節(4.1)で見てきた「お～なさい」や「お～なせへ」よりも表す敬意が低い表現である。また、用例の少なさも指摘されている⁽¹¹⁾。4.1と同様、用例数と表す敬意について見ていこう。

まず、「～なさい」「～なせへ」について【表1, 2, 3】の用例数の分布を確認する。【表1】中流以上の人々の使用では「～なさい」をB以下、「～なせへ」をAからCまでの広い範囲で、【表2】下層の人々の使用では、「～なさい」がA、「～なせへ」がB以上で、【表3】芸妓の使用では「～なさい」は見られず、「～なせへ」がAからCまでの広い範囲で使用されている。用例数について「～な

さい」:「～なせへ」を比較すると、中流以上の人々の使用が31(「～なされ」3例,「～なさい」28例):158, 下層の人々の使用が1:53, 芸妓の使用が0:16であり、各階層に共通して「～なせへ」の方が多用され、「～なさい」の使用は少なくなっている⁽¹²⁾。さらに「～なせへ」の使用を性差から見ると、中流男性:中流女性は151:7, 下層男性:下層女性は25:28となっており階層によって話し手の性別の偏りが異なっている。

次に、表す敬意について上下関係ごとに見ていこう。

(1) A(下→上)の関係における「～なさい」「～なせへ」の使用

Aの関係では、「～なさい」が下層の人々の使用に1例、「～なせへ」が各階層に使用が見られた。

【中流以上の人々の使用】 中流以上の人々の使用では男性が聞き手を責め立てる場面で「～なせへ」が用いられている。次の例14は、遊郭の主人蝶兵衛から客の侍忠六に対して用いられた例である。

(例14) モシ忠さんとやらよくきなせへ枕さがしの盗人のと口きたなく言ナざるが別にとられたものもなくことに今もいゝなざるにやア此かみいれに重の井の目かげるものがあるとやら第一夫はなんでござへやす。(中流以上遊廓の主人蝶兵衛→客・侍忠六) **【A】** [『恋』三編中之巻第十五回97]

話し手の蝶兵衛は、責め立てる場面以外では「おっしゃる」や「ごろうじまし」など高い敬意を表す尊敬表現を用いる。しかしこの例では、点線部「～なざる」という一段低い敬意を表す表現を用いている。このような使用は、「お～なせへ」(前掲例3)の使用と共通している。中流以上の人々にとって、「お～なせへ」と「～なせへ」はAの関係では用いにくい表現であるといえよう。

【下層の人々の使用】 一方下層の人々は、「～なさい」「～なせへ」ともに客を待遇する例が見られる。

(例15) そりやア違やす。よくもみなせへ。(下層男性・浮世床の下剃り留吉→下層男性・客短八) **【A】** [『床』初編下291]

(例16) サアかきまはしなさい。(流しの男→湯屋の客・芸妓お撥) **【A】** [『風』第二編卷之上85]

例15は浮世床の下剃り留吉から下層男性で客の短八に対して用いられた例である。留吉は、同じ客であっても中流男性の楽隠居に対しては「お～なせへ」を用いている(前掲例6)。この例15では下層町人同士であることから「～なせへ」を使っていると考えられ、留吉が「お～なせへ」と「～なせへ」を使い分けていることがわかる。例16は、湯屋の流しの男から客に対して用いられた例である。この湯屋の流しの男は湯屋の客と親しく話すことができるため、Bに近い関係である。高い敬意を表しているというよりは丁寧な言葉遣いとして用いているといえるだろう。

【芸妓の使用】 芸妓のAの関係での使用は、「～なせへ」12例全てが洒落本『角鶏卵』の例であった。

(例17) ほんとうに続けてきて見なせへわかるよふにしておめにかけてよふから。(芸妓お梅→中流男性・客衆之助) **【A】** [『角』336]

人情本では「お～なさい」「お～なんし」「お～なまし」「お+動詞連用形」等が多用されている。芸妓の「～なせへ」の使用は資料によって異なることがわかる。

(2) B〈対等〉の関係における「～なさい」「～なせへ」の使用

Bの関係での「～なさい」「～なせへ」の使用は、階層ごとに異なっているが、軽い敬意を表すという点では共通している。階層ごとに用例を挙げていこう。

【中流以上の人々の使用】 中流以上の人々のBの関係における「～なさい」の使用は、年配者から年少者に対して用いる例や親から子供に対して用いる例に偏っている。これらは社会的身分の上下関係で分けると、中流以上同士であるため、Bの関係であるが、年齢による違いからCの関係に近い例である。

(例18) お前^{まへ}もまた他に入れたい女でもあるなら遠慮なく言^{いひ}なさい。(中流女性・母親お柚→中流男性・息子米次郎) **【B】** [『閑』二編卷之中第十回 730]

例18は母親のお柚から息子の米次郎に対して用いられた例である。他には、次の例19のように、聞き手に対して注意する場合にも用いられている。

(例19) お跡から参りませう。モシエおま^まへ方に不断騒^{さわ}ぎな^なさる^るなといふは爰の事さ。今度からたしなみなさい。(中流以上番頭→客の芸妓) **【B】** [『風』第三編卷之上 178]

例19は湯屋の番頭から騒ぎの発端となった芸妓に対して注意している場面で用いられている。

このように、年配者から年少者へ、親から子へ、注意する者から注意される者へ等の関係で用いられていることから、「～なさい」は話し手が聞き手に対して威厳を示すために用いられると考えられる⁽¹³⁾。

一方、「～なせへ」の使用になると、軽い敬意を表すという点は「～なさい」と共通しているが、聞き手に対して威厳を示すために用いられているとはいえない。次の例20は、中流男性の佐次郎から卒八の母親に対して用いられた例である。

(例20) 卒公の気つかねへよふに、来て見物しなせへ。そりやアほんによ、おめ^めへに見せてへせ。(中流男性佐次郎→中流女性・八笑人卒八の母親) **【B】** [『八』三編追加上 171]

佐次郎は八笑人のメンバーに対しては「動詞未然形+さっし」や「～なせへ」を用いるが、卒八の母親に対しては「～なせへ」のみを用いている。「動詞未然形+さっし」は男性同士で多用され、「～なせへ」よりも表す敬意は低い。このことから、軽い敬意を表そうという意識をうかがうことができる。

【下層の人々の使用】 一方、下層の人々の使用では、「～なさい」の用例は見られず、「～なせへ」が軽い敬意を表す形式として用いられている。次の例21は青物売りから客に対して用いられた例である。

(例21) アイ、是にしなせへ。(下層青物売り→客・上方者けち兵衛) **【B】** [『風』第四編卷之中 258]

この青物売りについて本文中に「江戸者の商人は言^{あきうど}するどく上方者の買人は言^{かひて}やさしく聴ゆるゆゑ、物蔭より立聴けば、売人と買人と取違さうなり (P258)」と説明がある。聞き手のけち兵衛（「お」を冠する表現を用いる人物）と比べると「～なせへ」を用いるのはぞんざいな言葉遣いである。しかし、この青物売りに対して近くにいる番頭や客であるけち兵衛は普通に会話を続けており、不快感などは表していない。青物売りがぞんざいな態度で客を待遇しているのではないことがわかる。従っ

て、「～なせへ」は、軽い敬意を表す表現として用いられていると考えられる。また「～なせへ」は、下層女性同士の会話において互いに用いる例も見られる。普通の会話で互いに用いられていることから、これもやはり、ぞんざいな言葉遣いとして用いているというよりも、軽い敬意を表す表現として用いられていると考えられる。次の例 22 を見てみよう。

(例 22) 息子だと思ふから悪い。郭公^{ほととぎす}だと思つて居^ゐなせへ。(下層▲ばあさま→下層●ばあさま) 【B】
 [『風』 第三編卷之下 202]

例 22 の下層女性▲は、普通の会話の中で「～なせへ」を用いている。

【芸妓の使用】 B の関係における芸妓の使用は、1 例が洒落本の例、1 例が滑稽本の例であった。

(例 23) お早いじやアねへはな。おめ^へといふものはしよにんな者だの。さうしなせへ。随分つき合^あをしらねへが能^いのさ。(芸妓お撥→芸妓おさみ) 【B】 [『風』 第二編卷之上 84]

例 23 は、滑稽本『浮世風呂』の例である。芸妓同士が仕事を離れてくれた場面で話すときに「～なせへ」を用いていることがわかる。

(3) C (上→下) の関係における「～なさい」「～なせへ」の使用

C の関係での使用は、「～なさい」「～なせへ」ともに軽い敬意を表す場合に用いられている。B の使用と異なるのは、「～なさい」「～なせへ」ともに威圧感を伴って用いる例が見られることである。

(例 24) お前^め帰んなさい。(中流以上紫雲→下層・下女お澤) 【C】 [『清』 卷之十第十九回 658]

(例 25) 斯^いへ女中、お前はマア何所の何といふもので、何様いふ事て米次郎と、そんな約束をしたか、言て聞^きせなせへ。(中流以上福富屋万衛門→芸妓清鶴) 【C】 [『閑』 四編卷之中第二十二回 786]

例 24 は主人から下女に対して用いられた例である。紫雲がお澤を無理に家に帰そうとするときの発話であり、聞き手に対して威圧感を伴って用いている。例 25 は、客から芸妓に対して、経緯を話すように問い詰めているところで用いられている。どちらの例も聞き手に対して威圧感を与えているといえるだろう。

【芸妓の使用】 芸妓の使用も次の例 26 のように、威圧感を与えるときに用いられている。

(例 26) サアへ一処に座敷^まへ来^きなせへ。(遣手お杉→新造糸花) 【C】 [『梅』 第四編卷之十二 227]

例 26 は、遣手のお杉が新造糸花を怒る演技をしている。

4.3 「お+動詞連用形」の使用

「お+動詞連用形」の使用について見ていこう。「お+動詞連用形」は、「お～なさい」の「なさい」が省略された表現であるため、「お～なさい」よりも表す敬意が低いこと、親愛表現「お～だ」形式と似た敬意を表すことが今まで指摘されている。

まず、「お+動詞連用形」の用例数の分布について、【表 1, 2, 3】を見てみよう。【表 1】中流以上の人々の使用と【表 3】芸妓の使用では A から C までの広い範囲で、【表 2】下層の人々の使用では B 以上で用いられている。そして、話し手の性別に注目すると、各階層に共通して女性の使用が男性

の使用を上回っている。前節（4.1, 4.2）までは男性の使用に偏る表現（「お～なせへ」「～なせへ」）は見られたが、女性の使用に偏る表現は見られなかった（ただし、下層女性は「～なせへ」を互いに用いる（4.2））。この表現は女性に必要とされた表現といえるだろう。以下、上下関係ごとに用例を確認していく。

（1）A〈下→上〉の関係における「お+動詞連用形」の使用

Aの関係での使用は、親しい間柄で用いられる例が多い。

（例27）最否―とお云ひ。（乳母→中流女性・3歳お嬢さん）【A】『風』第二編卷之下137]

（例28）今に梅次さんと一所にかへるから、ちつと待てお出いでヨ。（芸妓米八→中流男性丹次郎）【A】『梅』初編卷之三88]

例27は乳母から主人（幼児）に対して、例28は情人間、芸妓の米八から中流男性の丹次郎に対して用いられた例である。下層の人々の使用は例27のように幼児（主家の子供）に対して用いた例のみであった。

ただし、次の例29のように親しい間柄ではない場合の例もわずかながら見られる。

（例29）只さしか、つたいたづらならば、殺されてもなぐさみ者にはならなそのひから、其気でどふでもしておくれ。（中流女性お民→悪漢）【A】『告』第二編第十二章462]

例29は中流女性から悪漢に対して用いられた例である。この発話はAというよりも話し手のお民が悪漢に対して強い態度で話している例であるため、Bに近い例といえるだろう。

（2）B〈対等〉の関係における「お+動詞連用形」の使用

Bの関係での使用も、各階層に共通して見られる。ただし、下層の人々の使用は、子供同士の会話に限られていた。中流以上の人々や芸妓は話し手に制限は見られない。次の例30を見てみよう。

（例30）ア、おまへもお出いで。（下層女性お春→下層女性お冬）【B】『風』第二編卷之上112]

例30は、下層女性のお春からお冬に対して用いられた例である。お春とお冬は6～7歳である。下層の人々の間では、子供同士の会話では「お+動詞連用形」を用いていたことがわかる。

（3）C〈上→下〉の関係における「お+動詞連用形」の使用

Cの関係での使用は、中流以上の人々と芸妓によって親しい間柄で用いられている。次の例31は中流男性の与四郎から芸妓の小万に対して用いた例である。情人間という親しい間柄である。

（例31）早くお咄はなしな。（中流男性与四郎→芸妓小万）【C】『恋』卷之上第一回8]

「お+動詞連用形」の使用は、女性の使用に偏ってはいるが、例31のように男性の使用例も見られ、女性語というわけではない。

5. 命令形以外との比較

「お～なさい」「お～なせへ」「～なさい」「～なせへ」「お+動詞連用形」それぞれの使用について見てきた。これと、命令形以外の「お～なさる」、「～なさる」と比較していこう。【表4】は、山田（印刷中）の命令形以外の「お～なさる」「～なさる」（それぞれ網掛箇所）と比較したものである。

表4 命令形以外の表現との比較

上下関係		A (下→上)				B (対等)				C (上→下)			
話し手の性別		男性		女性		男性		女性		男性		女性	
表現形式\聞き手の性別		男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
i	お～なさる	○△	○△	○△□	△□	○△	○	○□	○△□	○	○		
	お～なさい	○△	○△	○△□	△□	○△	○	○□	○△□	○	○		○
	お～なせへ	○△ ^{※①}	△	□ ^{※②}		○	○	○		○	○		
ii	～なさる	○△	○△	□	○	○△	○	○△□	○△□	○	○		○
	～なさい		△			○	○	○	○	○	○		○
	～なせへ	○△ ^{※③}	△	□		○△	○	○△□	△□	○	○	○	○□
iii	お+動詞連用形		△	○□	△□	○	○△	○□	○△□	○	○	○□	○□

*○は中流以上の人々の使用、△は下層の人々の使用、□は芸妓の使用、空欄は用例が見られなかったことを表わしている。なお、芸妓の使用を表わす□は女性の使用にのみ現れる。

*網掛している表現が命令形以外の表現である。

*※①（「お～なせへ」Aの男性から男性の○）は、例3で説明した中流男性が聞き手に対して非難の気持ちを表す例のみ。

※②（「お～なせへ」Aの女性から男性の□）は、例4で説明した、聞き手に対してそっけない態度を取るために用いられた例のみ。

※③（「～なせへ」Aの男性から男性の○）は、例14で説明した中流男性が聞き手に対して非難の気持ちを表す例のみ。

【表4】から以下のことがわかる。

- 命令形以外の「お～なさる」と似た分布を示すのは、命令形「お～なさい」であること。中流以上の人々の使用（○を付した箇所）のみ、Bの関係以下の「お～なせへ」の使用と似た分布を示している。「お～なせへ」のAの関係における中流以上の人々の使用と芸妓の使用は、※①②を記したように、使用場面に制限が見られるため、「お～なさる」や「お～なさい」の使用とは一致はしない。ただし、下層の人々の使用は、Aの関係においても「お～なさる」「お～なさい」「お～なせへ」が似た分布を示す。
- 男性の使用に注目すると（二重線で囲んだ箇所）、命令形以外の「～なさる」と命令形「お～なさい」は似た分布を示していること。
- 「～なさい」の使用は中流以上の人々の使用中心、「～なせへ」の使用は中流以上の人々の使用だけでなく、下層の人々や芸妓の使用も見られること。

6. まとめ

以上、今まで指摘したことを中心にまとめる。

6.1 命令形「お～なさい」、「お～なせへ」、「～なさい」、「～なせへ」、「お+動詞連用形」の使用

「お～なさい」と「お～なせへ」では、「お～なさい」の方が表す敬意の幅が広い。「お～なさい」はAの関係で用いることができるが、「お～なせへ」をAの関係で用いるのは、聞き手を非難したり、

そっけない態度を示したりする場合という制約がある。そして、性差による違いも見られる。「お～なさい」は男性の使用も女性の使用も見られるが、「お～なせへ」は男性の使用に偏る。Cの関係で用いる場合は、中流以上の人々の使用が見られる。「お～なさい」と「お～なせへ」は軽い敬意を表すという点では共通しているが、「お～なさい」は話し手が聞き手に対して、威厳を示す例が見られる。(4.1)

「～なさい」と「～なせへ」では、表す敬意の幅は大きく変わらないが、階層差が見られる。「～なさい」は中流以上の人々の使用では主としてB以下で用いられるが、下層の人々はほとんど用いず、芸妓も用例は見られなかった。「～なせへ」は中流男性と下層男性、下層女性がBの関係で多用する傾向にあり、中流女性や芸妓はほとんど用いない（芸妓の使用は、洒落本に大きく偏る。）。Cの関係では、中流以上の人々と芸妓の使用が見られる。「～なさい」と「～なせへ」は軽い敬意を表すという点で共通している。しかし、「お～なさい」「お～なせへ」とは異なり、「～なさい」「～なせへ」ともに、聞き手に対して威圧感を与える例である。(4.2)

「お+動詞連用形」はAからCまでの広い範囲で用いられ、親しい間柄での使用が多い。特に中流女性は、音訛形をあまり用いない分、「お～なさい」と「お+動詞連用形」を多く用いる傾向がある。(4.3)

6.2 命令形以外「お～なさる」, 「～なさる」との分布の違い

同形式の命令形以外と命令形を対応させてみると、それぞれが対応しているとは限らない。命令形以外の「お～なさる」と似た分布を示すのは、「お～なさい」であるが、同形式の音訛形「お～なせへ」は異なっている。中流男性が用いる場合、命令形以外の「お～なさる」のB以下と「～なさる」のAからCまでの分布と似た分布を示す。一方、命令形以外「～なさる」と似た分布を示すのは、命令形「お～なさい」である。ただし、Bの関係以下では「お～なせへ」や「～なさい」, 「～なせへ」とも似た分布を示している。

7. おわりに

本稿では、命令形「お～なさい」「お～なせへ」「～なさい」「～なせへ」のそれぞれの使用実態の考察と同形式の命令形以外との使用の分布の違いについての考察を行ってきた。音訛形との対応関係や、同形式の命令形以外との比較をすることによって、同形式でも音訛形や命令形になるとその使用に性差や用いる上下関係に違いが見られることを示すことができたのではないと思われる。本稿で扱わなかった形式の使用についての考察は、今後の課題としたい。

注(1) 命令形以外の実態については、山田（印刷中）で述べている。

(2) 人情本における町人男性の使用についてまとめたものである。

(3) 式亭三馬の作品における町人男性の使用についてまとめたものである。

- (4) 江戸後期の町人（男女）の使用についてまとめたものである。
- (5) 本稿の対象とする「お～なさい」と「お～なせへ」、「～なさい」と「～なせへ」は、それぞれ同じ待遇段階に属し、対称代名詞「おまへ」「おめへ」と対応している。
- (6) 広瀬氏は、まとめて扱うことに問題が残るとしながらも、今後の課題としている。まとめて扱う理由は、「お～なさい・なせへ」、「～なさい・なせへ」と他形式との関係を見ることに主眼を置くためである。
- (7) ただし、庶民語を対象とするため、武士言葉を話す人物の例は除外する。
- (8) 小松（1971）によると、音訛形「なせえ」は安永に入ってから出現した形である。
- (9) 「お～なさい」は、「お～なさいまし」と併用する例もある。小松（1966）が「[ます]のあたりになかったり」と説明する段階に相当するだろう。使用範囲が広い表現であることがわかる。
- (10) 例3以外に同じような場面での使用が1例見られる。他の2例は中流男性から悪漢に対して用いられた例であるため、身分関係で分類するとAであるがBに近い例である。
- (11) 「まし（ませ）」を下接する「～なさいまし」は、洒落本中の例がほとんどであった。また、その転訛形「～なさいまし」「～なせへし」などの使用を合わせても用例は少なかった。これは、命令形以外の「～なさいます」にも共通して指摘できる傾向である。
- (12) 小松（1966）が「～なさい」の用例が少ないと指摘しているがこれと一致している。
- (13) 現代語の「～なさい」も聞き手に対して敬意を表すために用いられるわけではない。現代語の使用に通ずる使い方であると考えられる。

○主な参考文献

- 岸田浩子（1974）「近世後期上方語の待遇表現 - 命令表現を中心に」『国語国文』43-3
- 小島俊夫（1974）『後期江戸ことばの敬語体系』笠間書院
- 小松寿雄（1966）「人情本の待遇表現」『国語と國文學』75
- 小松寿雄（1971）「第5章近代の敬語Ⅱ」『講座国語史』5、大修館書店
- 小松寿雄（1985）『江戸時代の国語：江戸語 その形成と階層』東京堂出版
- 田中章夫（1957）「近代東京語命令表現の通時的考察」『国語と国文学』34-5
- 土屋信一（2009）『江戸・東京語研究—共通語への道—』勉誠出版
- 広瀬満希子（1991）「『浮世風呂』における命令法について位相を視点として」『国文鶴見』26
- 広瀬満希子（1992）「『浮世床』における命令法について」『国文鶴見』27
- 広瀬満希子（1993）「『四十八癖』に見られる命令法について—話者とその使用形式の関係—」『国文鶴見』28
- 広瀬満希子（2000）「『仮名文章娘節用』における命令法について」『国文鶴見』35
- 山崎久之（1966）「江戸庶民語の待遇表現の体系（1）—三馬の作品を中心として—」『群馬大学教育学部紀要』16
 [『統国語待遇表現体系の研究』武蔵野書院1990所収]
- 山田里奈（2012）「江戸後期から明治20年代までの〈言う〉の意味を表す尊敬表現—「おっしゃる」を中心に—」
 『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊19-2
- 山田里奈（印刷中）「江戸後期における〈する・なる〉の尊敬表現—「お～なさる」系、「～なさる」系、「お～だ」系を中心に—」
- 山本志帆子（2010）「『桑名日記』にみる近世末期下級武士の命令表現」『社会言語科学』13-1
- 山本淳（1993）「『東海道四谷怪談』における命令表現の実態」『山形県立米沢女子短期大学紀要』28
- 湯沢幸吉郎（1954）『江戸言葉の研究』明治書院〔増補版、1957〕

○調査対象資料【洒落本】『躰婦人伝』泥郎子（1749）、『辰巳之園』夢中散人寝言先生（1770）—『日本古典文学大系』／『遊子方言』田舎老人多田爺（1770）、『甲駅新話』大田南畝（1775）、『古契三娼』山東京伝（1787）、『傾城買四十八手』山東京伝（1790）、『傾城買二筋道』梅暮里谷峨（1798）、『繁千話』山東京伝（1798）—『新編

日本古典文学全集』(以下、『新編』)【滑稽本】『譚話浮世風呂』式亭三馬(1809～1813) — 『新日本古典文学大系』／『柳髮新話浮世床』式亭三馬(1812～1813) — 『新編』／※『四十八癖』式亭三馬(1812～1818) — 『新潮日本古典集成』／『花暦八笑人』瀧亭鯉文(1820～1849) — 岩波文庫／『妙竹林話七偏人』梅亭金鷲(1857～1863) — 講談社文庫【人情本】『仮名文章娘節用』曲山人(1831～34) — (前編)鶴見人情本読書会(1998)『鶴見日本文学』2, (後編)鶴見人情本読書会(1999)『鶴見日本文学』3, (第三編)鶴見人情本読書会(2000)『鶴見日本文学』4／『清談若緑』曲山人(19世紀) — 『帝国文庫』／『春色梅児誉美』為永春水(1832～1833) — 『日本古典文学大系』／『春色恵の花』為永春水(1835) — 『岩波文庫』／『春告鳥』(1836～1837)為永春水 — 『新編』／『閑情末摘花』松亭金水(1839～1841) — 『名著』／**※『春色恋廻染分解』山々亭有人(1860～1862) — 浅川哲也(2012)『春色恋廻染分解 翻刻と総索引』(おうふう)／**『毬唄三人娘』(初編～三編)松亭金水(1862～1865) — 浅川哲也『人文学報』443(首都大学東京), 2011, (四編・五編)山々亭有人(1862～1865) — 浅川哲也『人文学報』458(首都大学東京), 2012 ◎なお, 該当箇所に関しては、『四十八癖』の第三, 四編は国会図書館所蔵の版本, 『春色恋廻染分解』の第四, 五編は明治大学所蔵の版本, それ以外は早稲田大学図書館所蔵の版本と早稲田大学図書館の古典籍総合データベース(<http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/>)により確認した。